論説委員　日曜に書く　佐野慎輔

# 日本が忘れた教育への思い

スーツ姿の一団がそこかしこで活発な議論を戦わせている。ヤンゴン中心街のホテル、ビュッフェ方式の朝食の場はいろんな言語が飛び交う。いまミャンマーが世界から大きく注目を集める象徴といってもいい。

建築ラッシュのヤンゴン市街から30分も行けば、しかし、もう喧噪はない。あるのは昔ながらの暮らし。やがて見え隠れする粗末な家々は、満足に水道や電気すら通ってはいない。

## 混沌のミャンマーで

「軍政から民主化への移行過程で、急激に発展するヤンゴンと恩恵も届かない村とが混在する。これがミャンマーの現実」

熊本県出身の平野喜幸さん(53)は長年、NPO法人「れんげ国際ボランティア会」ヤンゴン代表として支援活動を続けてきた。特に日本財団と協力し少数民族地域や貧困地帯での学校建設に力を注いでいる。

今回、日本歯科医師会と日本財団が連携する「TOOTH FAIRY」事業で建設された中学校の落成式に同行した。歯科医のもとで撤去された金属の寄付をうけ、資金に換えて国内外の子供たちの未来に役立たせる事業である。平野さんは事業と現場とを結ぶパイプ役だ。

ヤンゴンから幹線道路をひたすら西へ。東西冷戦時代のウ・タント国際連合事務総長が生まれたパンタナウも過ぎて約3時間、道が尽きて車が止まった。

エンジン付きの木造船に乗り換えてハンバーワリ川を遡ること1時間、ジージャウン村の船着き場で待っていたのは地元の若者たちとバイクの群れ。村唯一の交通機関である。

田の畝のような細い一本道、バイクは乾いた赤土を巻き上げながら走る。後部座席にしがみついて15分、人であふれたジージャウン中学校が見えた。子供たちや学校関係者だけではない。村人総出の式典だ。

## 村に中学校ができた

「ここはミャンマーでも最貧困の地域。でも村の人たちは何とか貧しさからはい上がろうと思っている。そのためには子供に教育を受けさせたい。学校は村人みんなの夢なんですよ」

平野さんは自助努力の必要を村人に説いた。学校は建設されたら終わりではない。持続するには何より、自分たちの学校だと思う意識が大事だと訴えた。

ジージャウン村住民の月収は80ドル程度、頼るのは細々とした農業だから12カ月収入があるわけではない。しかし、そんな中でも制服を調え、環境整備に労働力を提供した。教師たちは月100ドルほどの給与の10%を寄付、上級学校進学に向けた奨学資金の一助にと蓄え始めた。

大人の熱意が子供たちにも伝わらないわけはない。

4年生のペンザ・ムーミ君(10)は「新しい校舎をみてやる気がでてきた。貧しい人をたくさん助ける医者になりたい」と夢を語り、5年生のスン・ペーニさん(12)は「学校まで1時間かけて通うのは大変だけど、授業は楽しい」と話す。彼女の将来の夢も医者だ。というより、彼らが知っている職業は医者か教師か農民だけ。そんな現実に生きている。

## 国造りの熱気感じた

ミャンマーは10年、あるいはプレ小学校をいれた11年制の教育制度を持つ。しかし、地方に住む子供たちは学校まで遠く、通えないことが多い。劣悪な家庭環境から何年も通わずやめてしまう子供も少なくない。

日本財団は軍政時代からミャンマーで300校以上、うち日本歯科医師会と組んで18校の学校建設に携わってきた。建設場所の選定では、まさに村人の熱意が重視されている。

今回訪ねた村のようなところばかりではない。平野さんの大変さはそこにある。

国を興す大本は教育、ならびに教育環境整備にある。教育によって人材を育む大切さを実践したのは日本だった。明治維新や戦後復興にまで戻らなくともいい。東日本大震災で称賛された行動は教育の証しとはいえまいか。一方で次元の低い犯罪や公職者の言動に欠陥も感じる。

村のあるイラワジ地区では「道徳を重視している」と教育関係者が胸を張る。ベトナム戦争終結に尽力したウ・タント氏を学ぶ授業も始められた。

「昔の日本を見るような思いがするし、ミャンマーの人々の誇りを感じた」。落成式に立ち会った日本歯科医師会の足立英二事務局長の感想である。

混沌のただ中からミャンマーは立ち上がろうとしている。教育に向けられる熱い思いは、どこかで日本が置き忘れてしまったものに思えてならない。

(さの　しんすけ)